古代大毛遺跡を考える

小川芳範

Ⅰ．はじめに

昨年度私は、古代大毛池田遺跡の重要性を“美濃”刻印須恵器出土の面から発表した。今年度は、この地域（門間沼・大毛池田・大毛沖遺跡）の調査がほぼ完了することもあり、遺跡全体から葉栗郡の古代を考える機会と判断して本稿を草することとした。以下３点の前提のうえ本論を進める。

(1) 近接する３遺跡のつながりが、調査の進行に伴い、より鮮明となり少なくとも古代の様相は門間沼・大毛池田・大毛沖遺跡を同一空間内で営まれているとした点。(以下大毛遺跡と称する。それぞれ門間沼地区・池田地区・沖地区とする。図版２参照。)

(2) 池田地区から門間沼地区に続いているとされる大溝群の掘削時期が、葉栗郡内における古墳造営時期のピークとほぼ一致する７世紀代であることと、これら大溝の規模・数が他に例のないほどの土木事業である点。

(3) 本稿は７世紀代の大毛遺跡について、本年度門間沼地区を担当した立場から論ずることとする点。

Ⅱ．葉栗郡の古代

図版１には、古代葉栗郡域の現在までに判明している遺跡が示してある。ここでは特に７世紀代に絞って考えることとする。この時代の国内の歴史に目を向ければ、歴史上何本かの指にはいる程の争乱が起こっている。壬申の乱（672年）である。７世紀代は、それまで続いてきた蘇我氏に代表される有力豪族の力を背景にした政治から、律令に基づく天皇親政政治への転換期となった時代である。この天皇親政の時代を確立した天武天皇（大海人皇子）が、壬申の乱で大友皇子（近江朝方）に勝利をし政治改革担当者の地位を得たのである。

ここで壬申の乱と葉栗郡の関わりについて触れておく。672年６月に起こった壬申の乱は、古代でも最大級の内乱であり天下分け目の戦いであった。天智天皇の死後、近江大津宮の大友皇子と吉野宮滝の地にあった大海人皇子との律令国家確立の覇権争いであり、おじとおいとの生死をかけた戦いであった。結果は大海人皇子側の勝利するところとなったのだが、この勝利には美濃国と関係の深い舎人３人の活躍があった。村国男依、身毛君広、和珥部臣君手である。尾張国、特に葉栗郡に関わりがあるのは村国男依である。『和名抄』によると美濃国各務郡村国郷、尾張国葉栗郡村国郷がみえるが、彼はこの一帯を本拠地にした豪族と推測され、美濃側に本拠が木曽川を挟んで尾張側にも一族が分布していたとみられている。彼は大海人皇子の吉野退隠に際しても終始行動を共にし、乱の勃発にあたる672年６月22日、皇子の密命をうけて安八磨郡湯沐邑の多臣品治と連絡をとり、ここを中心とする周辺の農民たちを動員して６月26日には不破の地をおさえることに成功した。また、吉野から伊勢の国の中途まで進んでいた皇子一行にその成功を急報したのも男依であった。ついで７月２日、近江方への攻撃を開始した時、男依は不破の地の西へ出て大津宮を攻める主力軍の将軍筆頭に任命され、任務を達成したのである。ところで、男依が不破の道を塞ぐのに成功した兵力は3000人といわれているがこれは尾張の国司小子部連鉏鉤の動員した２万人に比べてかなり少なかった。

男依が吉野をたってからわずか４日では、美濃国一円から兵力を動員することは不可能に近く、これは国や郡よりも男依ら出身地の兵がまず動員されたものとみられる。ところで、尾張国司小子部連鉏鉤の率いた２万人であるが、これは壬申の乱の前に近江側が美濃・尾張の国司に命じ、天智天皇の陵をつくる人夫を徴発し武器を持たせたと伝えられるものにあたるはずのものとみられる。本来、吉野方を討つはずのものがその意に反して吉野方につくこととなり、後に小子部連鉏鉤は自殺してしまったとされる。つまり、この時点において軍を統率する真の実力者は国司ではなく、もとの国造の流れをくむ郡司などの地方豪族と考えられている。つまり、尾張国においても例外ではなく、国司は郡司層の地方豪族（尾張連など）の意向に反する行動は難しかったのである。これは、その後の天武朝の政策における地方豪族の軍事力削減策に裏付けられるものである。

ここで、壬申の乱でめざましい活躍した村国氏についてまとめてみる。この乱以前は、美濃国各務郡東部を中心に尾張国葉栗郡北部に及ぶ小地域を基盤とし、大海人皇子の舎人の一人として男依が活躍、私兵的軍隊を統率し大海人皇子方に貢献、勲功の第一に推された。彼の卒去後地方豪族出身の“外”の文字をつけて外小紫位という大臣位が贈られ、また功封についても『続日本紀』大宝元年（701）７月の条にただ一人120戸が記されている。

古代史上に登場している男依以降の村国氏についてあげてみる。

村国連志我麻呂（男依の子）	・霊亀２年（716）４月、功田10町、従６位下 ・養老２年（718）正月、従５位下 ・天平３年（731）正月、従５位上
村国連広田	・『和泉監正税帳』天平9年度（737）、天平10年4月5日付従7位下
村国連子虫	・天平11年正月、正６位より外従５位下 ・天平12年11月、外従５位上
村国連益人	・写経生（８世紀半ば）
村国連嶋主（男依の孫）	・藤原仲麻呂（恵美押勝）に仕える。彼の子藤原執棹（美濃守）を補佐する。美濃国少掾。 ・天平宝字８年（764）９月、恵美押勝の乱。正６位上嶋主内応。 ・天平神護２年（766）11月10日、彼の死が罪なく誅されたとして従５位下が贈られる。
村国連虫麻呂	・天平宝字５年（761）正月、正６位上より外従５位下 ・天平宝字７年（763）４月16日付『大師家蝶』において「知家事播磨国介外従五位下村国連武志麻呂」とある。 ・天平宝字８年（764）正月、恵美押勝の子藤原辛加知が越前守となり、虫麻呂が越前介に起用される。

	・天平神護２年（766）12月、無位より本位の外従５位下へ復される。 （恵美押勝の乱により官位剝奪の処分）
村国連子老	・天平宝字７年（763）正月、正６位上より外従５位下 ・天平宝字８年（764）８月、恵美押勝の乱直前に能登守 （乱後虫麻呂同様官位剝奪） ・宝亀元年（770）10月、再び外従５位外へ昇進
村国連息継	・延暦18年（799）正月、外従５位下、越中介 ・同年６月、阿波権介、同年９月10日、阿波介
村国連益満	・９世紀初め、「僧空海奉献表」に彼の姿がみられる。
村国連数子	・貞観17年（875）正月21日、正６位上から外従５位下に
村国連業世	・仁和元年（885）４月１日、子の春沢（天文生）とともに姿がみられる

葉栗郡村国郷は、男依以降村国氏一族により営まれていたことは確かなようである。現在の愛知県江南市村久野辺りが古代村国郷と比定されている。村国氏建立と伝わる古代寺院音楽寺をはじめ、７・８世紀代の遺物散布がこの村久野周辺で確認されており、村国氏一族定着以降の遺跡が浮かんでこよう。

次に葉栗郡の主郷が所在したといわれる愛知県一宮市浅井町近辺に目をむける。表１には浅井北古墳群の古墳造営時期のピークが７世紀代にあたることがわかる。また、葉栗郡司の葉栗人麿建立という黒岩廃寺も同時期にあたる。前述してきた村国連男依の活躍に伴う評価は、その後の論功行賞的な叙位からも非常に高いものである。壬申の乱で果たした功績は彼一個人に限らず美濃・尾張の地方豪族などの動員力によるところが大きい。このような歴史的背景からこの時期に美濃では寺院建立事業が多くみうけられる。尾張（葉栗郡）に目をむけると、郡中心部に古墳群が形成されている。美濃と葉栗郡では寺院と古墳の違いはあるが、時間と労力を費やす事業であることには変わりはないと考える。また、これだけのことがこの時期に成し遂げることができた地方豪族層の勢力背景がうかがえると同時に、特に美濃側では川原寺式寺院が多く存在することから、地方支配施策の一環として寺院建立を中央政府が進めていった証とする考え方もある。

Ⅲ．古代大毛遺跡

当センターは、平成５年度から３年間にわたり門間沼・大毛池田・大毛沖遺跡として発掘調査を実施してきた。そして、古代についてこれらの遺跡は、その成果から同一空間内に営まれた遺跡とすることが望ましいと考え、ここでは大毛遺跡と呼ぶこととする。

古代大毛遺跡のピークは７世紀代に存在する。図版３の大毛遺跡遺構模式図から、７世紀代は門間沼地区の居住域と池田地区・門間沼地区の大溝群が展開している。また、池田地区から沖地区には旧河道が確認されている。

居住域では、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、小溝、ピットが確認され、その時期は、猿投窯編年のH－50以降である。これはその当時の河川によって形成された微高地に展開しているものと考えている。居住域が展開していた時期に、池田地区から門間沼地区に続く大溝群が掘削され、以後この地区では溝埋没期まで明確な居住域は平安時代前期まで存在しない。大溝群は池田地区では5条確認され、全て北東方向から南西方向にほぼ平行に続き門間沼地区につながる。95年度門間沼地区で調査した溝4が幅8m深さ1.5mの規模であり、現時点では池田地区の溝6に相当するものと考えている。大溝の掘削時期は、全て7世紀代であり、またその規模は幅5mから10m、深さ1mから2.5mと大きい。

今後このような大溝群の具体像を把握することが、古代大毛遺跡を解明するうえで非常に重要である。ここでは、断定的なことに言及することは敢えて避け問題提起としたい。溝掘削目的には、防御・防水・水運利用・灌漑・区画等考えられる。何条もの大溝が掘削された大土木事業、いわゆる開発行為が数十基の古墳築造が可能であった葉栗郡に於いてなされていることに特別な意味を感じる。つまり、壬申の乱という古代大争乱の勝者へ多大な功績をあげた葉栗郡は、戦さだけでなく古墳群築造や大溝群掘削という大土木事業を成し遂げ得るだけの人民動員力や財力に関して十分な地域と考える。また、葉栗郡が隣接する中島郡や美濃国各務郡などと比較して古代寺院が少ないのは、寺院建立の代わりに古墳群築造・大溝群掘削がされたと推察できよう。

最後になったが、図版の掲載にとどまった池田地区から沖地区にかけて確認された旧河道と大溝群との関わりも今後の課題の1つである。また、沖地区で確認された護岸施設をともなった旧河道は、河川改修により河道が人為的に造られたものと考える必要がでてきた。さらに、門間古墳周辺の微高地に存在する6世紀代の集落の一端も確認されており、古代大毛遺跡の空間がより膨らんだ。

Ⅳ．おわりに

古代大毛遺跡について、本稿が全て論じたとは考えていない。今後刊行されていく報告書等において、この件についても論じられていくことであろう。また、昨年度の年報に於いて「“美濃”刻印須恵器からみた大毛池田遺跡その1」を発表した。本稿は今後、「その2」として扱いたい。

追記

本稿を草するにあたり、一宮市博物館土本典生氏、㈶愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏・永井宏幸氏・武部真木氏には多くのご教示・助言をいただきました。感謝の意を表します。また、門間沼地区出土遺物には愛知県陶磁資料館井上喜久男氏、愛知県県史編さん室城ヶ谷和広氏にご指導いただきました。記して謝辞とします。

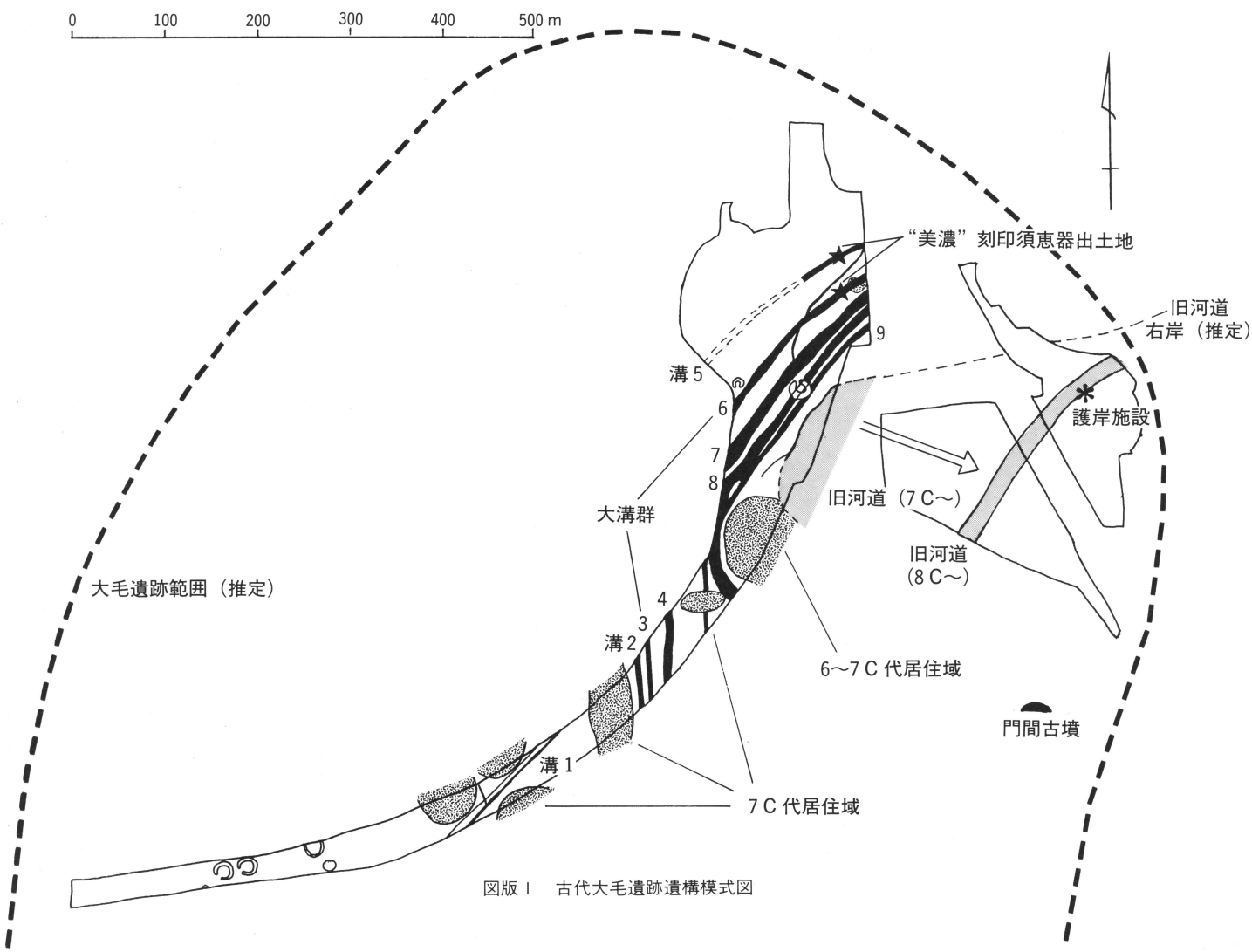
参考文献

『一宮市史』資料編三・四（昭和38・49年）
『岐阜県史』通史編古代（昭和46年）
「壬申の乱と東海」（第3回春日井シンポジウム、1995年）
『大毛沖遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集、永井宏幸他、1996年刊行予定）

表Ⅰ　葉栗郡内の古代遺跡

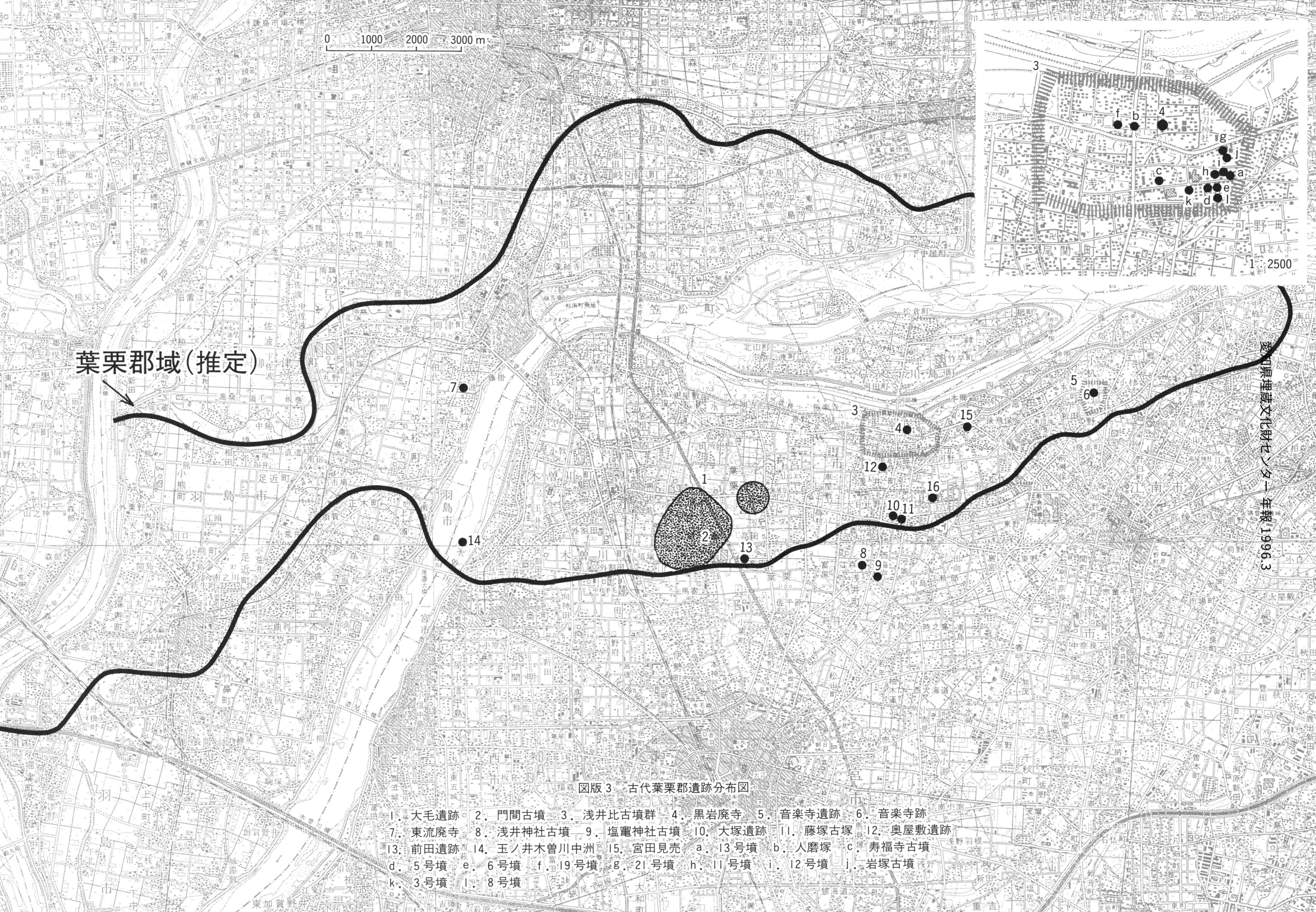
	6世紀	7世紀	8世紀
古代寺院		黒岩廃寺 東流廃寺	音楽寺
浅井北古墳群		13号　5号　11号　3号 人麿塚　6号　12号 寿福寺古墳　19号　岩塚古墳 21号	8号
浅井周辺部（その他）	塩竈神社古墳	浅井神社古墳 藤塚古墳 小日比野字堤北ノ切遺跡 高田字瓦ヶ野遺跡	大塚遺跡 奥屋敷遺跡 高田字前田遺跡
大毛遺跡	門間古墳 門間沼地区円墳（3基～） 同上区居住域 池田地区円墳（2基）	門間沼地区居住域 池田～門間沼地区大溝群 池田～沖地区旧河道 池田地区居住域　沖地区居住域	池田～沖地区旧河道 沖地区居住域

※浅井北古墳群については、時期の判明しているものに限り掲載した。



図版Ⅰ　古代大毛遺跡遺構模式図

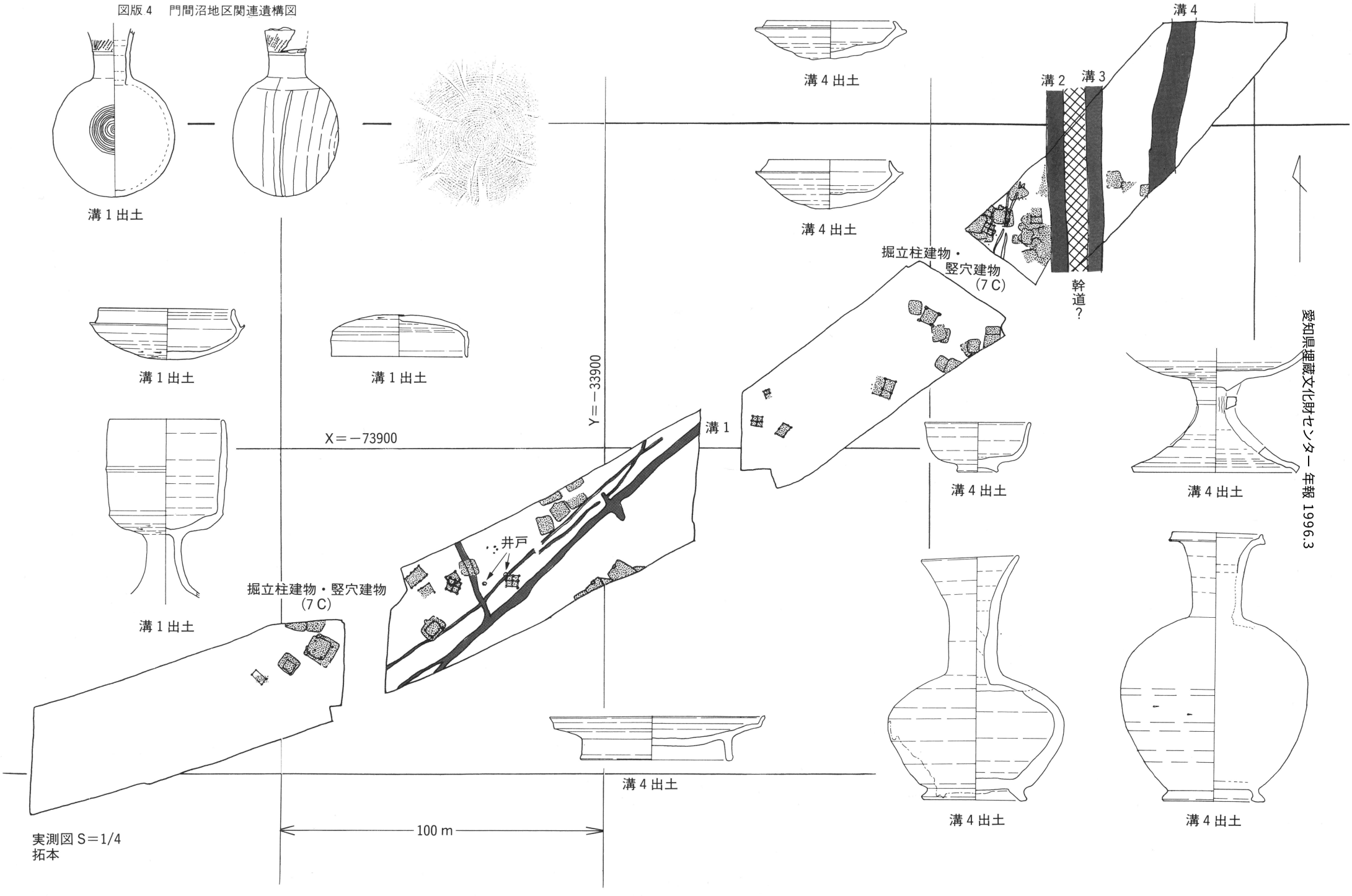
図版2　大毛遺跡調査区位置図
93年度調査区
94年度調査区
95年度調査区
0
100
200
300
400
500 m
大毛遺跡
池田地区
沖地区
門間沼地区
N



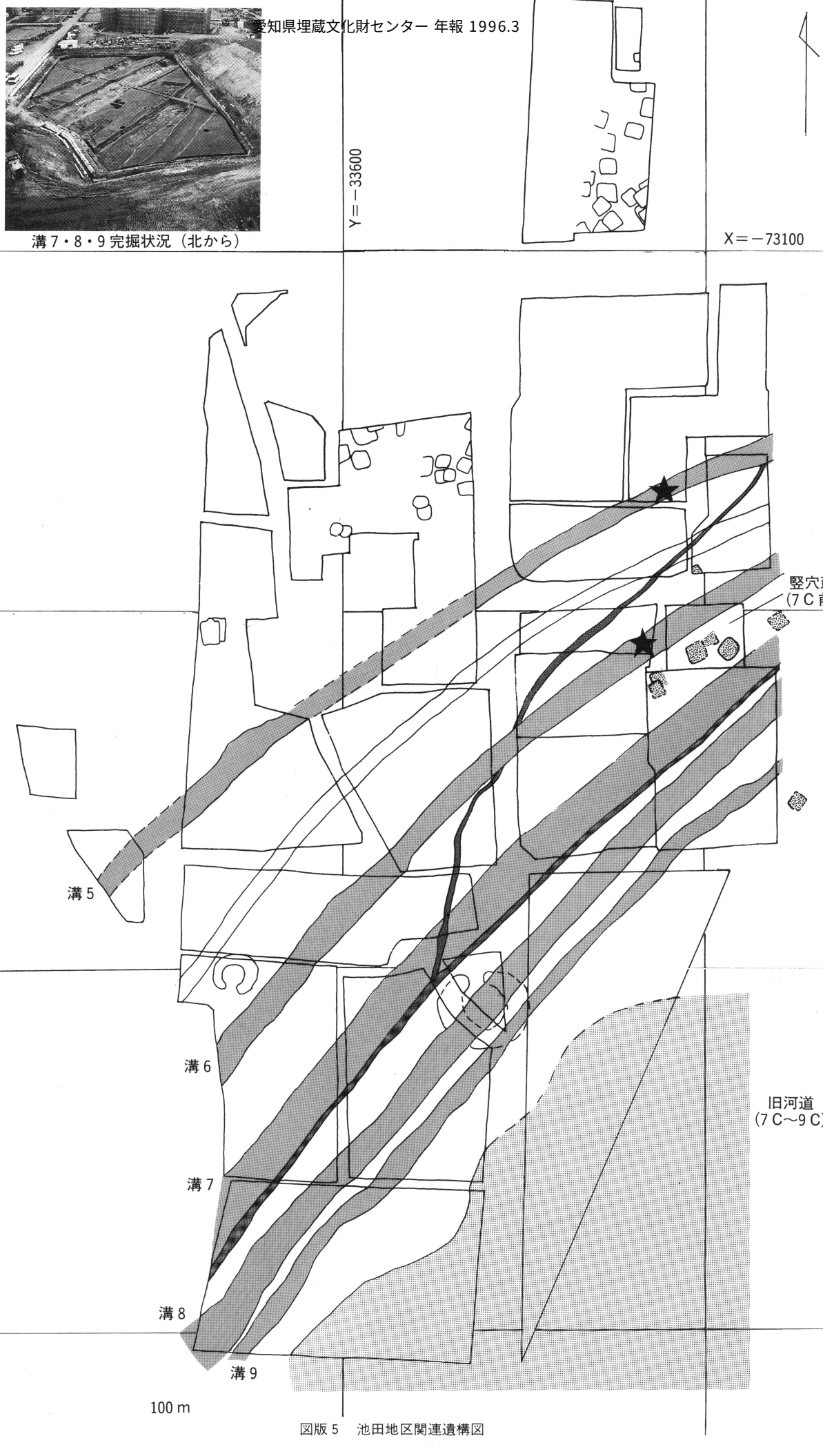
図版3　古代葉栗郡遺跡分布図

1．大毛遺跡　2．門間古墳　3．浅井比古墳群　4．黒岩廃寺　5．音楽寺遺跡　6．音楽寺跡
7．東流廃寺　8．浅井神社古墳　9．塩竈神社古墳　10．大塚遺跡　11．藤塚古塚　12．奥屋敷遺跡
13．前田遺跡　14．玉ノ井木曽川中洲　15．宮田見売　a．13号墳　b．人磨塚　c．寿福寺古墳
d．5号墳　e．6号墳　f．19号墳　g．21号墳　h．11号墳　i．12号墳　j．岩塚古墳
k．3号墳　l．8号墳

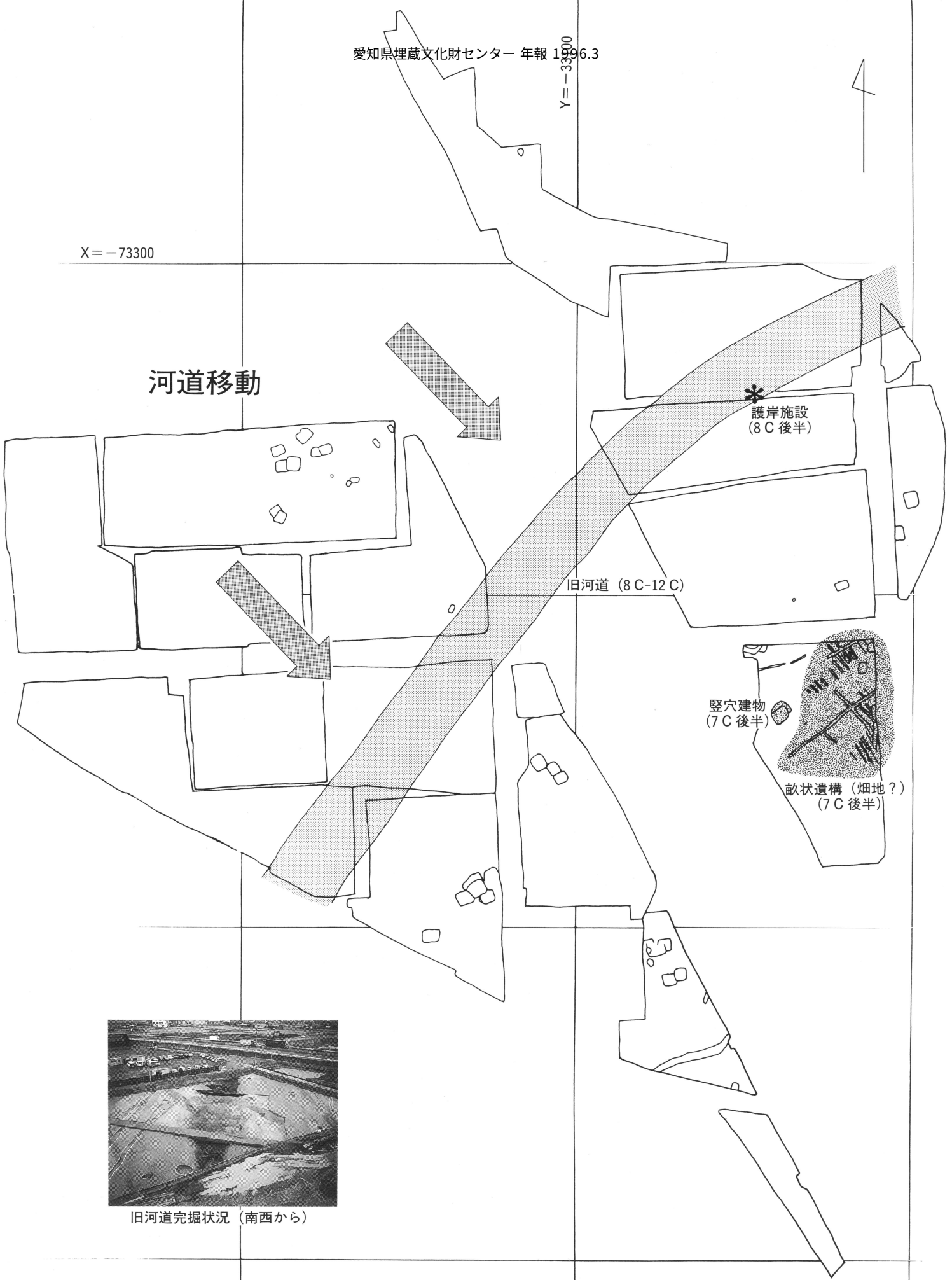
図版 4　門間沼地区関連遺構図



溝 7・8・9 完掘状況（北から）



図版 5　池田地区関連遺構図



旧河道完掘状況（南西から）

図版6　沖地区関連遺構図